

## 表紙解説

# 「ガムラン音楽」について 中川 真

写真1 (全体)



ガムラン gamelan はインドネシアの民族楽器である。この楽器で演奏される音楽もまたガムランと呼ばれるが、特に伝統的な楽曲のことをカラウィタン karawitan ともいう。ガムランの語源であるガムル gamel は「手で練る」「打つ」といった意味であり、まさにガムランの多くが打楽器であることを考えれば、実に端的な命名となっている。

ガムランの起源は、何人かの先達の研究者の考察をもってしても、未だ確定的なことはいえない。例えば、ソロの王宮に伝わる門外不出の舞踊・音楽ブドヨ・クタワン bedhaya ketawang ですら、記録の初出は18世紀後半である。もちろん、ブドヨ・クタワンが突然、18世紀に現れたわけではない。ジャワでは、マタラム王国創始期のスルタン・アグン(王位1613-46)の作品と伝えられているが、それも伝承に近い話である。また、最も古い楽曲といわれるモンガン monggang は8世紀以前には成立していたという説もあるが、これも確実な根拠はない。9世紀に建立されたとされる仏教寺院ボロブドゥール遺跡のレリーフに、いくつかの楽器が描かれているが、今日のガムランと直接的につながる楽器は、むしろ少ない。

要するに、ガムランの歴史を系統だって記述することは不可能なのである。だからといって手をこまねいているわけにはゆかない。21世紀へ残された大きな課題として、音楽考古学も含み込んだ壮大なガムラン音楽史、というより東南アジア音楽史が纏められる必要があるだろう。ガムランを知るには東南アジア諸国の音楽との関連が重要だからである。

さて、このガムランの楽器は前方に背の低い楽器、後方になるにつれ嵩は大きくなり、最後尾のゴング類は立ち上がっているような感じがする。確かに、ガムランのこの配置は「地形」を想起させる。周囲を海で囲まれたインドネシアは、海から内陸に入るに従って緩やかに高度をあげ、ちょうど中央部で高い火山となり、後背地は再び下りとなって海に連なってゆく。頂点である山岳地帯はカミのすまう聖域であり、それと対比するかのよう、ガムランの最も巨大で背の高いゴングもまた、聖なる楽器なのである。

こういった象徴的な対応関係から、個々の楽器の担う役割と、現実の社会における人々の果たす役割の類似性などといった社会的対応まで、ガムランはまさにインドネシアの縮

図あるいはモデルであるといえる。従ってガムランから、私たちは逆に様々なインドネシアの文化的側面を読み解くことができるのである。

写真2 (全体の演奏風景)



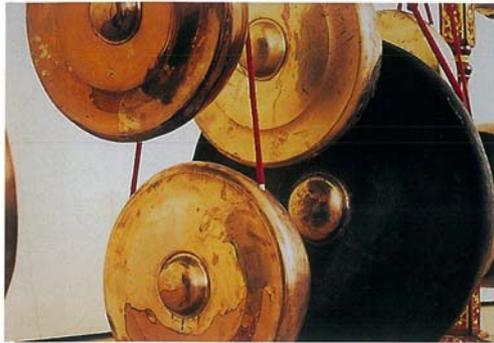
人のいないガムラン楽器は、彩色された装飾の美しさも相俟って、実に豊饒で、また端然たる雰囲気醸し出している。しかし、ここに人が入ると、この楽器はいっぺんに猥雑ともいえる人間くさい表情をもち始める。かつて私はオーストラリアのグラーツ音楽祭のディレクターに会い、ガムランの演奏写真を見せたことがある。初めてガムランを見た彼女は、笑い出した。これが演奏している写真？ほんとにこれは楽器なの？ 私にはバサール(市場)で人が物を売っているようにしか見えないわ。確かに、そういわれてみれば、そうだ。色んな姿勢で、色んな方角を向いた人々がここにいる。まさに「叩き売り」の現場みたいだ。しかし、ガムランの面白さは、しばしば指摘される楽器のもつ神聖さとともに、この雑駁さが同居している点にあると思う。

写真3 (スレントゥムslentem)



大半が青銅製の打楽器であるガムランは厳格に調律され、全てのパートが複雑に絡まりあって、歌を紡ぎ出す。ガムランで最も重要なのは「歌う」ことである。それは声のパートのみならず、あらゆる楽器のパートに要請される。なかでも、このスレントゥムはバルンガン balungan という、旋律の骨格のような部分を演奏する重要な楽器である。しっかりとした紐で吊された音板の下には、竹かブリキでできた太い共鳴筒が据え付けられている。円盤形の木の周りに布を巻いたタブー tabuh (ばち) によって、柔らかだが芯のある音が生まれる。

写真4 (ゴンgongとクンプルkempul)



ガムランの最後列をなす楽器群。ガムランは周期性をもった音楽だが、スレントゥムのように恒常的に鳴っている楽器もあれば、要所要所でのみ鳴る楽器がある。このゴンとクンプルは後者である。まずこの形態に目がゆくだろう。中心部に突き出たこぶのような部分を柔らかいばちで打つと、永遠に続くかとおもわれる低い音が、ゆったりとしたうなりを伴って鳴り響く。特に黒い色をしているゴン・アグン gong ageng は、最も頻度は低いが最も重要なタイミングで、つまり旋律の終止を知らせるポイントで鳴る。まさにガムラン全体の象徴的存在になっている。ゴンには最も神聖な力が宿っているとされ、定期的に供物が捧げられねばならない。さもなくば、災厄が起こると信じられている。そもそもこの楽器の製法からして驚異的で、1枚の熱い青銅板をハンマーで叩きながら成形をしていくのである。鑄型にはめるのではない。製法からして既に神懸かり的の所業が含まれているのだ。またゴンを代表とする金属器の音に聖性が宿っているという認識は、東南アジアから東アジア一帯に広がっており、日本の祇園囃子のコンチキチンもその系譜に連なっている。ガムランのゴンと祇園のカネは、細い糸で遠く結ばれている。

写真5 (クندانkendang)



ガムランを組織論的にみると、最も興味深いのはいっけんリーダーがいないように見える点だ。確かに西洋のオーケストラだと、指揮者がいて音楽の支配関係が非常にはっきりと分かる。ガムランは、そういった目で見て分かるリーダーはいない。しかし、見えない部分にはちゃんといののだ。クندانがそのひとつだ。彼は音楽のイロモ irama (テンポ) をメンバーに伝え、また舞踊作品の場合は、踊り手と演奏家と

の仲介役をも果たす。しかし、彼は専制的なリーダーではない。他のいくつかのパートもまた、音楽の進行に大きくかかわっているからだ。例えば、ルバブ rebab と呼ばれる胡弓のような2弦の擦弦楽器、あるいはボナン bonang と呼ばれる小ゴングをいくつか鍋をひっくり返したように並べたものなど。こういった意味では、ガムランというコミュニティでは権力は1カ所に集中せず、むしろ何人かのセミリーダーたちへと分散されている。そして絶えず「合議的に」曲は進行してゆくのである。総譜のような固定した楽譜をもっていないゆえに、曲はそのときのメンバーによって異なった姿を現す。そこにガムランの醍醐味がある。

写真6 (ボナンbonang)

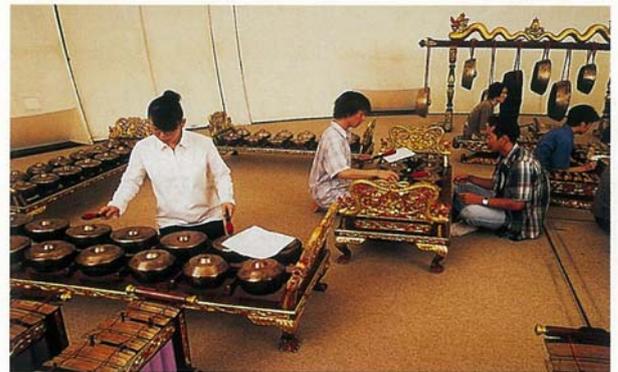


写真7 (サロンsaron)



写真8 (クノンkenong)



写真9 (ガンバン gambang)



〈筆者及表紙作成者紹介〉

足立 眞三	大阪芸術大学教授 (造形美術)
井関 和代	大阪芸術大学教授 (染織)
上杉 昭夫	大阪芸術大学助教授 (イタリア語、イタリア文学)
梅田 幸男	大阪芸術大学助教授 (テキスタイルデザイン)
遠藤 賢治	大阪芸術大学助教授 (立体造形)
太田 明仁	大阪芸術大学助教授 (デザイン)
太田 眞	大阪芸術大学非常勤講師 (写真)
太田 米男	大阪芸術大学助教授 (映画)
河合 隆三	大阪芸術大学教授 (彫刻)
近藤 正樹	大阪芸術大学嘱託助手 (芸術学)
田畑 榮一	大阪芸術大学助教授 (アメリカ文学)
田端 修	大阪芸術大学教授 (都市設計)
田村 昭彦	大阪芸術大学教授 (デザイン)
豊原 正智	大阪芸術大学教授 (映像学)
中川 眞	京都市立芸術大学助教授 (音楽学)
西尾 直	大阪芸術大学教授 (デザイン社会学)
樋口 文彦	大阪芸術大学教授 (建築計画、建築 CAD)
深田 尚彦	大阪芸術大学教授・学長 (描画行動の実験的研究、ほか)
福岡 喜久雄	大阪芸術大学教授 (スペースデザイン)
福原 成雄	大阪芸術大学助教授 (造園、環境デザイン)
藤本 康雄	大阪芸術大学教授 (西洋建築史)
松田 明	大阪芸術大学教授 (音楽学)
南村 康弘	大阪芸術大学教授 (写真)
宮畑 カレン	大阪芸術大学助教授 (英語)
宮村 一幸	大阪芸術大学教授 (演技、演出)
宮本 知	大阪芸術大学助教授 (マーケティング・コミュニケーション)
山形 政昭	大阪芸術大学教授 (建築史)
横溝 秀実	大阪芸術大学助教授 (絵画)
依田 義右	大阪芸術大学教授 (西洋近世哲学史)
小原 直	大阪芸術大学庶務課

---

---

## 《編集後記》

「1999年」が終り「2000年」を迎えようというこの時期、「藝術」第22号ができ上りました。

時をとらえて刻み目を入れることを発見した人智のなせる業の成り行きとはいえ、興味深い数字の年に巡り合わせたものです。おかげで、人それぞれの現在にあつて各様に解説や感慨や省察をもつことができるというものです。この22号は、私こと、「藝術」編集のお役目を托されてから丁度切りのよい10号目にあたります。皆様の暖い御援助に支えられて大過なく、漸くここまで辿り着きました。心から感謝しながらお手元にお届けいたします。

気がつくとおびただしい情報の波にとり囲まれて、ともすれば眩暈さえ覚える現代です。その発信・伝達的手段もますます複雑にかつ簡単に、速度もいよいよ加速し、世界が、一網打尽とはいかぬまでも、その網目に結び合わされてゆくのが感じます。しかしメリット・デメリット渾然の状態の中で、特に芸術に携わるものの新鮮な認識・思索・表現になる「藝術」が、正確な里程標をひとつひとつ築いてゆくことも重要な役割でしょう。積極的な発表・執筆が期待されます。

今回の表紙は音楽の三学科（音楽学・音楽教育・演奏）の提案で、新しくいれられた“ガムラン”の楽器を写真学科の太田眞講師と小原直氏の撮影でとりあげました。中川真京都市立芸術大学助教授の行き届いた解説と併せて御覧下さい。

今後の「藝術」の励みのために御批判御助言お願いいたします。

各方面の諸氏の御理解と御盡力に厚くお礼申し上げます。

(山崎萁子)

## 大阪芸術大学 紀要〈藝術〉22

---

平成 11 年 11 月 20 日発行  
発行／大阪芸術大学  
大阪府南河内郡河南町 TEL0721-93-3781  
編集／大阪芸術大学紀要編集委員会

委員長	文芸学 学科・教授	山崎 萁子		
委員	美術学 学科・教授	足立 眞三	環境計画学科・講師	下休場千秋
	デザイン学科・助教授	宮本 知	音楽教育学科・助教授	樋口 光治
	建築学 学科・教授	山形 政昭	演奏学 学科・講師	高久 理恵
	文芸学 学科・助教授	笹谷 純雄	舞台芸術学科・教授	宮村 一幸
	音楽学 学科・助教授	芹澤 尚子	芸術計画学科・教授	豊原 正智
	放送学 学科・助教授	高木真理子	教養課程・助教授	伊藤 正博
	写真学 学科・助教授	原見 政男	芸術文化研究科・教授	武谷なおみ
	工芸学 学科・教授	井関 和代	芸術制作研究科・教授	河合 隆三
	映像学 学科・助教授	吉岡 敏夫		

印刷／日本写真印刷株式会社